

「市内最古の貝塚」

とぎぎき 鶺鴒貝塚

香取遺産

Vol. 38



▲鶺鴒貝塚近景



▲鶺鴒貝塚貝層断面

古代人が捕食して捨てた貝殻が堆積している遺跡を貝塚と呼んでいます。縄文時代早期から出現し、弥生時代以降にもみられ、全国に広く分布しています。

貝塚には、貝殻に含まれるカルシウム成分によって動物や魚類の骨や骨角器がよく残っているため、当時の生活や自然環境を知る上で大変重要な遺跡です。

縄文時代の貝塚は、全国で3千余り確認されています。そのうち6百以上が千葉県にあり、それらは東京湾沿岸と利根川下流域に集中しています。利根川下流域に位置する本市にも、たくさんの貝塚があります。

縄文時代は、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6

期に区分されていますが、県内の貝塚の大半は中期から後期のものです。

鶺鴒貝塚は、鶺鴒字広畑にあり、大須賀川を望む台地の東斜面に形成されています。昭和32年に行われた、早稲田大学の発掘調査によって、数少ない早期の貝塚であることがわかり、昭和45年5月に市の史跡に指定されました。平成7年には、千葉県教育委員会が県内主要貝塚発掘調査の一環として、測量と発掘調査を行っています。

この2度の調査で、貝塚は東西11m×南北13m、厚さ1m前後の小規模な貝塚で、縄文時代早期でも早い時期に形成されたことが明らかになりました。規模は小さいが、この時期の貝塚は全国でも数が

少なく、神崎町の西ノ城貝塚とともに最古級の貝塚です。

縄文時代早期末から前期初めころには、地球温暖化がピークに達し、海水面が上昇しました。いわゆる「縄文海進」です。最近の調査では、海岸線が標高2.7m前後まで達したことがわかっています。その後、徐々に後退し現在に至っています。鶺鴒貝塚が形成されたのは、まさに、海水面が上昇しつづつあった時期にあたります。

出土した貝類は、ヤマトシジミなど淡水産が主体で、ハマグリなど鹹水（海水）産も少量見られます。鶺鴒貝塚を残した人々は近くの河川を中心に漁撈活動をし、時には少し遠出をして海の貝を採りに行ったのでしょうか。